

機関番号：32685

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008 ~ 2010

課題番号：20730434

研究課題名(和文) 「注視・傾聴」行動に着目した児童の積極的授業参加行動に関する研究

研究課題名(英文) Positive class participation by elementary school pupils relationship to "eye contact and listening".

研究代表者

布施 光代 (FUSE MITSUYO)

明星大学・教育学部・准教授

研究者番号：10454331

研究成果の概要(和文)：本研究では、小学校の児童の積極的授業参加行動のうち授業に集中して聴き、教師の指示に従うなどの授業の基本となる行動である「注視・傾聴」行動に注目し、その行動を促進する要因、阻害する要因を検討した。また、実際の小学校の授業観察の結果から、「注視・傾聴」行動の多い児童、少ない児童の行動の特徴を描き出した。これらの結果をもとに、「注視・傾聴」行動を促進するためのプログラムを検討したい。

研究成果の概要(英文)：This study is to examine to positive class participation by elementary school pupils. In particular, the "eye contact and listening" focused on this study. Examined the factors that impede or facilitate "eye contact and listening" action. In addition, elementary school pupils observation, characteristics of children who are do eye contact and listening, fewer children revealed the characteristics of the "eye contact and listening". Based on these results, I want to consider a program to promote" eye contact and listening".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：学習過程, 積極的授業参加行動, 「注視・傾聴」行動, コンピテンス

## 1. 研究開始当初の背景

学校の授業場面において見られる児童の行動の中で、発言や挙手は、特に積極的な授業参加の現われとされており、そのような行動を増やすことが重視されている(藤生, 1991, 1992)。では一方で、挙手や発言をしない児童は、授業への動機づけが低いと判断してもよいのだろうか。例えば、授業中に発言することはなくても、教師の話に集中して聞く児童もいる。このような児童の積極的な授業参加を評価する視点も必要であろう。

これまで、従来から積極的であると評価されてきた挙手や発言のような行動に制限することなく、授業に集中して話を聞くなどの行動も含めた授業への積極的な参加行動を「積極的授業参加行動」とし、その様相や加齢に伴う変化を検討してきた(布施・小平・安藤, 2006)。評価者である教師に対して調査を行った結果を基に作成した積極的授業参加行動項目を用いて児童に調査を実施した。その結果、積極的授業参加行動の下位概念として、「注視・傾聴」、「挙手・発言」、「宿題・

準備」の3つが抽出された。そして、積極的授業参加行動と国語に対する動機づけとの関連を検討したところ、動機づけと積極的授業参加行動とは正の関連を示していた。その中でも、最も動機づけとの関連が強いのは「注視・傾聴」であり、このような行動を子どもの動機づけの現われとみなすことの重要性が示唆された。同様の結果は、教科の比較を行うこと、また、積極的授業参加行動と動機づけの関連をより詳細に検討することを目的として行った調査でも確認された(安藤・布施・小平,2008)。つまり、「授業への動機づけは高いが、黙って授業を聴いている児童」の存在が改めて確認されたといえる。従って、従来のように授業の中で「挙手・発言」を重視して児童の意欲・動機づけの評価を行うと、高い動機づけを持っている児童を過小評価してしまう危険性が指摘できる。そのような問題を防ぐためにも、「注視・傾聴」を積極的授業参加の指標として評価する視点を提案すること、動機づけとの関連の強い「注視・傾聴」行動を促進するような介入プログラムの提案が必要であると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究では、これまで行った研究(布施ら,2006; 安藤ら,2008)で明らかにされた積極的授業参加行動の3側面のうち、「注視・傾聴」行動を取り上げる。本研究の目的は以下の2点にまとめられる。

- (1) 従来、あまり積極的な授業参加として評価されることのなかった「注視・傾聴」行動と授業に対する動機づけとの関連を児童に対する調査および授業観察を通して検討し、「注視・傾聴」行動を引き起こす要因、阻害する要因を明らかにする。
- (2) 積極的に授業に参加できる児童を育成するために、話を聞くスキルなどの児童に対する介入プログラムを提案することを目指す。また、提案した介入プログラムの効果を検証した上で、それを多くの教師が使えるように、教師に対するトレーニングを行うなど、より一般化することを目標とする。

## 3. 研究の方法

### (1) 積極的授業参加行動に対する評価観の検討

対象者：公立小学校の教師4名(男性4名,年齢:30代から40代)を対象とした。教職経験年数の平均は12.25年,担当学年は,低学年3名,高学年1名であった。また,都内の私立大学に通う教職志望の大学生148名(男性81名,女性67名)を対象とした。平均年齢は19.6歳(範囲:18歳~26歳,SD=1.32歳)であった。

質問内容：教師に対するインタビューでは,以下の4点について尋ねた。①子どもたちを

授業に集中させるために行っていること。②子どもたちの「注視・傾聴」行動を促進するために工夫していること。③子どもたちが授業に集中しているか,先生や他の子どもの話に傾聴しているかを判断する際,どのようなところに注目するか。また,子どもの「注視・傾聴」行動を評価する観点。④「注視・傾聴」行動を児童の評価(通知表などの成績としての評価)にどの程度反映させているか。調査内容：大学生を対象とした調査は,以下の内容で実施された。「挙手・発言」をよく行うが「注視・傾聴」や「準備・宿題」をしない子ども,「注視・傾聴」をよく行うが「挙手・発言」を自発的に行わない子どもの2人の小学生を紹介する文章(布施,2009)を提示した。この2人の小学生に対し,小学校の教師になったつもりで以下の質問項目に回答するよう求めた。①どちらの子どもがより授業に積極的に参加していると思うか。また,その理由。②2人の子どもの「関心・意欲・態度」に対する5段階評定。③教師として,子どもたちの「関心・意欲・態度」を評価するとき,子どもたちの授業中の「挙手や発言」と「授業をしっかりと聞くこと」のどちらを重視するか。また,その理由。

### (2) 積極的授業参加行動に影響する要因の検討—達成動機とコンピテンスの関連について—

調査対象者：公立小学校3校の3年生~6年生435名(男児223名,女児210名,不明2名,平均年齢10歳8ヶ月)。

手続き：調査は2008年12月~2009年2月に実施した。担任教師に依頼し,クラス毎に一斉調査を行った。

調査内容：①積極的授業参加行動尺度(34項目,4件法)：布施ら(2006)において構成された授業に対する積極的授業参加行動の3下位尺度項目に,一部の項目を追加し,実施した。国語の授業を想定させ,授業内でそれぞれの行動をどの程度行っているかを尋ねた。②達成目標尺度(16項目,4件法)：Elliot & Church(1997)が作成した達成目標質問紙を,田中・山内(2000)が翻訳し,小中学生用に項目の表現を修正したものを利用した。「マスタリー目標」「パフォーマンス接近目標」「パフォーマンス回避目標」の3つの下位尺度から構成されていた。③児童用コンピテンス尺度(12項目,4件法)：桜井(1992)が作成した児童用コンピテンス尺度から,「学習コンピテンス」,「社会コンピテンス」,「自己価値」の3領域に関する項目をそれぞれ4項目ずつ用いた。

### (3) 授業観察による検討

対象：①N県の公立小学校4年生1学級,児童20名(男児11名,女児9名)と担任の男

性教諭。②①の担任教諭が次年度担当した4年生1学級、児童22名(男児13名、女児9名)。

**観察手続き:**①2学期の半ばから3学期にかけての約半年間、週1回程度の観察を行い、記録を取った。また、ビデオカメラを教室の前方と後方に設置し、授業場面を録画した。また、ICレコーダーによる録音を行った。②学級の形成時期である1学期の間、週1回程度の観察を行い、児童の積極的授業参加行動の評定を行った。ビデオカメラを教室の前方と後方に設置し、授業場面を録画した。また、ICレコーダーによる録音を行った。

**調査内容:**①12月と3月の計2回、児童を対象とした積極的授業参加行動に関する調査を実施した。②5月、7月、3月の計3回、児童を対象とした積極的授業参加行動に関する調査を実施した。さらに、児童のパフォーマンスについて、担任教師にクラスの児童を3段階に分類するよう求めた。

(4) 積極的授業参加行動に関連する要因の検討—読解課題および学業達成との関連について—

**調査対象者:**公立小学校3校の5年生～6年生308名(5年生男児88名、女児62名、6年生男児94名、女児64名)。

**調査内容:**①積極的授業参加行動尺度(23項目、4件法):安藤ら(2009)において構成された授業に対する積極的授業参加行動尺度を実施した。国語の授業を想定させ、授業内でそれぞれの行動をどの程度行っているかを尋ねた。②国語の授業の内容理解:調査実施日の国語の授業について、勉強した内容を自由に回答するよう求めた。なお、教示は2通り用意し、質問紙にはいずれかの教示が記載されていた。教示1.今日の「国語」の授業で一番大切だと思ったことは何ですか。なるべくくわしく書いてください。教示2.今日の「国語」の授業で勉強した内容は何か。なるべくたくさん書いてください。

各クラスの担任教師には、その日の国語の授業のポイントや、子どもたちに理解しておいてほしい内容について記述を求める質問紙を実施した。③国語の読解課題(3問):「標準問題集 小5 国語」(受験研究社)の中から、「観察文を読む」という読解問題を一部改訂して用いた。

**手続き:**質問紙による調査を行った。クラス毎に担任教師に依頼し、一斉調査を行った。

#### 4. 研究成果

(1) 積極的授業参加行動に対する評価観の検討

##### ①小学校教師の評価観

「挙手・発言」と同等に扱っている教師は少なく、「挙手・発言」に比べ、「注視・傾聴」

は主観的な判断となりやすいため、評価に含めることに躊躇する傾向があることが示唆された。確かに、「挙手・発言」に比べ、「注視・傾聴」は教師からは捉えにくい行動である。しかし、教師が「挙手・発言」に重きを置いた評価を行うことで、布施ら(2006)、安藤ら(2008)で示された「高い動機づけをもち「注視・傾聴」を行うが「挙手・発言」を行わない子ども」を過小評価する危険性は免れないであろう。

##### ②教職志望の学生がもつ評価観

「挙手・発言」をより積極的だと判断したり、「関心・意欲・態度」の評価の観点として重視したりする割合、「注視・傾聴」をより積極的だと判断したり、評価の観点として重視する割合では、「注視・傾聴」を評価する方が多かったものの、大きな差は見られなかった。また、自由記述された判断の理由を分析した結果、得られたキーワードのカテゴリは、「挙手・発言」を評価する群と「注視・傾聴」を重視する群では、「授業」、「聞く」、「発言」、「挙手」などのほぼ共通したカテゴリであった。このような結果から、「挙手・発言」と「注視・傾聴」は、どちらをより重要視するかには違いは見られるが、積極的授業参加行動の評価としてはどちらも重要であり、どちらか一方のみができればよいと考えられているのではないと推測される。

このような現職の教師と教職志望の学生の違いは、経験の差が大きく関与していることが考えられる。無藤・月刊『悠+』編集部(2010)は、「関心・意欲・態度」の評価について、各教科が対象としている学習内容に関心を持ち、自ら課題に取り組もうとしている態度を子どもが身につけているかどうかを評価するものであるとしている。しかし、「関心・意欲・態度」の評価の現状について分析した結果、発言や挙手の回数、忘れ物をしない回数などの単なる「学習態度(姿勢)」によって行われたり、教師の経験や感覚に基づいて行われたりしていることを指摘し、表面的な状況のみに着目することにならないよう警鐘を鳴らしている。例えば、教職に就く前の学生時代には、「注視・傾聴」を評価する考えを持っていても、教師としての経験を重ねていくうちに、評価の難しさから可視化しやすい「挙手・発言」をより評価するように変化していくこともあるかもしれない。このような場合、布施ら(2006)、安藤ら(2008)の結果で得られた「注視・傾聴」の方が「挙手・発言」よりも授業に対する動機づけと強く関連することに対する理解が得られるよう働きかけていくことで、教師の認識を変えるよう促すこともできるのではないかと考える。

##### (2) 積極的授業参加行動に影響する要因の検

討—達成動機とコンピテンスの関連について—

①積極的授業参加行動と達成目標との関連

達成目標が積極的授業参加行動に及ぼす影響について、学年ごとに検討を行うために、構造方程式モデリングを行った。まず、達成目標の下位尺度から積極的授業参加行動へのパスを仮定した。また、達成目標の下位尺度間に相関を仮定し、積極的授業参加行動の誤差間にも共分散を仮定した。そして、それぞれの学年で同じパスを想定するがパス係数を制約しないこととして、多母集団の同時分析を実施した。モデルの適合度は CFI=1.00 であり、データに適合していると判断された。パフォーマンス回避からは、5年生と6年生の「注視・傾聴」のみに対して有意な負のパスが得られた。高学年になると、失敗を回避しようとするのが、「注視・傾聴」を抑制させるようである。また、パフォーマンス接近からは、3年生と6年生の「注視・傾聴」のみに対して有意な負のパスが得られた。3年生と6年生においては、より有能であることを示そうとすることが、「注視・傾聴」行動には結びつかないといえる。

一方、マスタリー目標からは、4年生の「注視・傾聴」と6年生の「準備・宿題」を除いて、全てのパス係数が有意となっていた。学習や理解を通じて能力を高めることを目標とするマスタリー目標をもつことによって、全般的な積極的授業参加行動が促されるようである。これらの結果から、高学年になると、高いパフォーマンス回避や接近という目標をもつことが、積極的授業参加行動を低める可能性が考えられる。

②積極的授業参加行動とコンピテンスとの関連 児童のコンピテンスが積極的授業参加行動に及ぼす影響について、学年ごとに検討するために構造方程式モデリングを行った。達成目標と同様に多母集団の同時分析を実施した結果、モデルの適合度は CFI=1.00 であり、適合していると判断された。

学習コンピテンスからは、5年生の「注視・傾聴」と「準備・宿題」および6年生の「挙手・発言」を除いたすべての積極的授業参加行動に対して、有意な正のパスが得られた。学習コンピテンスと積極的授業参加行動は、概ね関連しており、学習に対するコンピテンスをもつことは、授業に対する全般的な参加行動を促すと考えられる。一方、社会コンピテンスからは、4年生の「準備・宿題」のみ有意な負のパスが示された。また、自己価値からは、4年生の「準備・宿題」と6年生の「挙手・発言」に対するパス係数のみが有意であった。ただし、学年が上がることによる何らかの方向性がある変化は確認されなかった。

(3) 授業観察による検討

①児童の積極的授業参加行動の変化 5月, 7月, 3月の積極的授業参加行動の変化を Figure 1 に示す。1 要因分散分析を行った結果、「注視・傾聴」(F(1,19)=5.32, p<.05) および「準備・宿題」(F(1,19)=12.15, p<.01) において有意差が得られた。多重比較の結果、「注視・傾聴」では有意な差は見られなかったが、5月よりも3月の方が低い傾向が示された (p<.10)。「準備・宿題」については、5月よりも7月の方が有意に低いことが得られた (p<.05)。学級の形成時期であり、年度の始まりでもある時期が、最も積極的授業参加行動が高く見られることが示唆された。

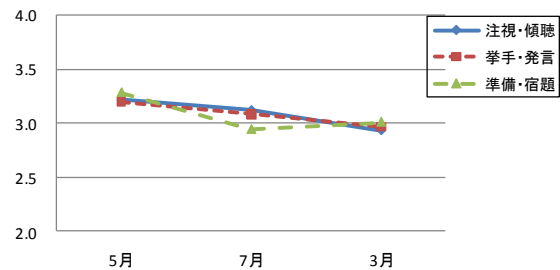


図1 積極的授業参加行動の変化

②積極的授業参加行動と達成目標の関連の変化 5月, 7月, 3月における積極的授業参加行動と達成目標の関係を検討するために下位尺度間相関を算出した(表1)。5月では、「注視・傾聴」とパフォーマンス回避のみに有意な関連が示されたが、7月では、「注視・傾聴」とマスタリー目標の間にのみ正の関連が見られた。3月になると、「注視・傾聴」とパフォーマンス接近、またすべての積極的授業参加行動とマスタリー目標との間に有意な関連が得られた。このことから、新しい学級が形成された年度の始まりでは、失敗を回避しようとするのが「注視・傾聴」を促進すると考えられる。一方、次の学年が近づく学年末になると、学習や理解を通じて能力を高めることを目標とするマスタリー目標をもつことによって、全般的な積極的授業参加行動が促されるようである。

表1 積極的授業参加と達成目標の関連

5月	注視・傾聴	挙手・発言	準備・宿題
パフォーマンス接近	.02	-.08	-.12
パフォーマンス回避	.46 *	.26	.42
マスタリー目標	.27	.28	.23
7月			
パフォーマンス接近	.41	.01	.02
パフォーマンス回避	.30	-.33	.40
マスタリー目標	.67 **	.23	.36
3月			
パフォーマンス接近	.44 *	.08	.33
パフォーマンス回避	.41	-.14	.24
マスタリー目標	.56 **	.59 **	.57 **

\*\* p<.01 \* p<.05

### ③授業観察データの分析

児童を対象とした積極的授業参加行動の調査結果から各児童の「注視・傾聴」得点を算出した。その結果と観察者の児童に対する積極的授業参加行動の評定に基づき、「注視・傾聴」行動の少ない児童、多い児童を2名ずつ抽出した。担任教師には、児童の抽出が妥当であることの確認を求めた。ここでは、記録されたビデオ映像の中から、国語の授業5回分（いずれも物語の内容）を分析の対象とした。

**分析方法：**授業中の児童の行動を、15カテゴリ（①先生を見る、②黒板を見る、③発言者を見る、④教科書やノートを見る、⑤手を挙げる、⑥全体に発言する（発表）、⑦発話、⑧授業と関係ないおしゃべり、⑨教科書を読む、⑩ノートを書く、⑪考える、⑫他のことをする（よそごと等）、⑬何もしていない、⑭やることが終わって待っている、⑮体を動かす）に分類した。対象とした4人の児童について、それぞれ1回の授業ごとに、開始から終了までの時間の間に、14カテゴリの行動がそれぞれどれくらい生起するかを測定した。

**結果：**抽出された4人の児童に対し、分析カテゴリとした14カテゴリの行動がどれくらい授業時間中に見られるのかを測定した。対象児の各行動について、分析対象とした5回の授業の平均出現率を算出し、それに基づき「注視・傾聴」が少ない児童と多い児童の平均出現率を算出した（図2）。視線を向ける方向について、「注視・傾聴」の少ない児童は多い児童よりも教師を見る時間は多いが、黒板や授業中の発言者に対しては、「注視・傾聴」の多い児童の方が見る時間が長い傾向が示された。また、「注視・傾聴」の少ない児童は、考える時間も多いものの、授業とは関係のないことをしている時間や、体を動かしている時間が多いことも明らかとなった。このような授業と関係のない行動の生起が、「注視・傾聴」を低めている可能性が考えられる。ただし、今回分析対象とした授業の内容や教師の発話等との関連について、さらに詳細に検討する必要がある。

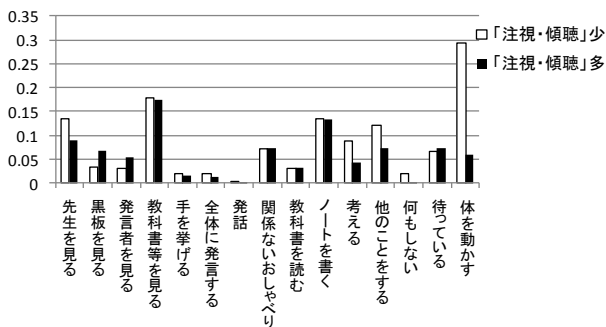


図2 行動カテゴリの出現率

(4) 積極的授業参加行動に関連する要因の検討—読解課題および学業達成との関連について—

①積極的授業参加行動については、安藤ら(2009)での尺度構成に従い、「注視・傾聴」「挙手・発言」「準備・宿題」の3下位尺度得点を算出した。 $\alpha$ 係数を算出したところ、「注視・傾聴」: $\alpha = .861$ 、「挙手・発言」: $\alpha = .758$ 、「準備・宿題」: $\alpha = .758$ であり、十分な信頼性が確認された。

読解課題について、問1は正答に2点、部分的正答に1点、誤答に0点を与えた。問2および3に対しては、正答に2点、誤答に0点を与え、得点を合計し、読解課題得点とした。その結果、得点範囲は0から6までとなり、平均は3.87、標準偏差は1.52であった。読解課題得点を従属変数とし、2(学年) $\times$ 2(性)の2要因分散分析を実施したところ、性の主効果が有意( $F(1, 304) = 22.19, p < .001$ )であり、男児より女児の方の点数が高かった。これに対して、学年の主効果と交互作用は有意ではなかった。読解課題は5年生向けの問題集から作成したが、学年の差は見られなかった(表2)。

表2 読解課題得点の平均・標準偏差

	男子	女子
5年生	3.56 (1.55)	4.32 (1.21)
6年生	3.53 (1.64)	4.38 (1.33)

( )内は標準偏差

②積極的授業参加行動と読解課題得点との相関係数および偏相関係数を算出した(表3)。その結果、読解課題と「準備・宿題」との間に有意な正の相関が示された。このことから、学習を読解力という形に定着させるためには、授業外の活動である「準備・宿題」行動が必要であることが示唆される。しかし、「注視・傾聴」「挙手・発言」との相関は有意ではなかった。

表3 読解課題得点と積極的授業参加行動の相関および偏相関係数

	読解課題得点	
	相関係数	偏相関係数
注視・傾聴	.02	-.11
挙手・発言	-.02	-.04
準備・宿題	.19 **	.23 ***

\*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

③記述量に関する分析については、どの程度の量を記述できているのかに注目し、積極的

授業参加行動との関連を検討した。それぞれの児童の記述について文字数をカウントした結果、教示 1.については、5年生で 65.00 文字、6年生で 60.55 文字が平均となっていた。教示 2. では、5年生で 63.67 文字、6年生で 58.54 文字が平均であった。教示の種類（教示①と教示②）と学年（5年生と6年生）を独立変数とする分散分析を実施したところ、教示（ $F(1,239)=.087$ ）および学年（ $F(1,239)=.711$ ）の主効果、交互作用（ $F(1,239)=.004$ ）ともに有意ではなかった。記述された文字数と積極的授業参加行動との関連（相関係数）を示したものが表 4 である。教示 1. では、「注視・傾聴」得点とのみ正の関連が確認された。これは「注視・傾聴」得点が高いほど、授業の内容として記述される文字数が多くなる傾向にあったことを示している。一方で、教示 2. では、6年生で「注視・傾聴」得点、「準備・宿題」得点と正の関連があり、「注視・傾聴」、「準備・宿題」得点が高いほど記述される文字数が多い傾向にあった。このことから、「注視・傾聴」が高い児童は、授業で一番大切なことを詳しく書くように求められた際、より多くの文字を使って記述する傾向にあることが明らかとなった。また、授業で学んだ内容をできるだけたくさん書くように求められた場合、「注視・傾聴」が高いほど、また「準備・宿題」が高いほど、多くを記述できる傾向にあることも6年生で確認された。記述内容についてさらに詳細な分析が必要ではあるものの、「注視・傾聴」の傾向が強い児童が、授業でより多くの情報を得ている可能性が示唆された結果であるといえよう。

表4 記述された文字数と積極的授業参加行動の相関関係

	教示①		教示②	
	5年生 (n=82)	6年生 (n=94)	5年生 (n=39)	6年生 (n=28)
注視・傾聴	.32 **	.34 **	.29	.39 *
挙手・発言	.21	.14	.22	.09
準備・宿題	.17	.15	.27	.52 **

\* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001

教示①: 今日の「国語」の授業で一番大切だと思ったことは何ですか。なるべく詳しく書いてください。

教示②: 今日の「国語」の授業で勉強した内容は何か。なるべくたくさん書いてください。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- ①布施光代 (2011). 児童の積極的授業参加行動に対する評価観の検討 明星大学研究紀要－教育学部, 1, 35-46. (査読有)
- ②安藤史高・布施光代・小平英志 (2008). 授業に対する動機づけが児童の積極的授業参加行動に及ぼす影響－自己決定理論に基づいて－ 教育心理学研究, 56, 160-170. (査読有)

〔学会発表〕(計 7 件)

- ①布施光代・安藤史高・小平英志 (2010). 児童の積極的授業参加に関する研究(9)－4年生における縦断的变化の検討－ 日本心理学会第 74 回大会発表論文集, 1219.
- ②布施光代・小平英志・安藤史高 (2010). 児童の積極的授業参加に関する研究(8)－積極的授業参加行動と達成目標およびコンピテンスとの関連における学年差－ 日本教育心理学会第 52 回総会発表論文集, 713.
- ③小平英志・布施光代・安藤史高 (2009). 児童の積極的授業参加に関する研究(7)－積極的授業参加行動の学年差・性差－ 日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集, 566.
- ④安藤史高・布施光代・小平英志 (2009). 児童の積極的授業参加に関する研究(6)－積極的授業参加行動と達成目標・コンピテンスとの関連について－ 日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集, 565.
- ⑤布施光代 (2008). 児童の積極的授業参加行動と教師観との関連 日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集, 774.
- ⑥Mitsuyo FUSE (2008). Development of Understanding of Human Beings in Elementary School Pupils: The study of Understanding Biological Traits and Social Traits. Poster presented at 20th International Society for the Study of Behavioral Development.
- ⑦布施光代 (2008). 大学生における積極的授業参加行動の検討 日本発達心理学会第 19 回大会発表論文集, 636.

〔図書〕(計 5 件)

- ①中澤潤 (監修) 中道圭人・榎本淳子 (編) (2011). 幼児・児童の発達心理学 ナカニシヤ出版, 191(59-72).
- ②心理科学研究会 (編) (2009). 小学生の生活とこころの発達 福村出版, 237( 52-60, 119-127).
- ③多鹿秀継・南憲治 (編著) (2009). 児童心理学の最先端－子どもの育ちを科学する－ あいり出版, (178-189).
- ④加藤義信 (編) (2008). 認知発達心理学入門 ひとなる書房, (104-119).
- ⑤都筑学 (編) (2008). やさしい発達心理学－乳児期から青年までの発達プロセス ナカニシヤ出版, (169-183).

### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

布施 光代 (FUSE MITSUYO)  
明星大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 10454331